

資料(Data)

折り紙のルーツを訪ねるドイツの旅(2)

A research tour of the origin of ORIGAMI in Germany (2)

大森 隆子*
ŌMORI, Takako*

キーワード: 折り紙のルーツ, 恩物, フレーベル博物館

Key words: origin of ORIGAMI, gift, FRIDRICH FRÖBEL MUSEUM

はじめに

本報告は2014年度文部科学省科学研究費助成事業「基盤研究C」に採択された「諸外国における幼稚園導入過程から見た現代日本の保育—新しい保育史観の試み—(課題番号26381054)」(オムリ慶子氏を研究代表者とし、筆者を含め3人の研究分担者¹⁾からなる共同研究)に対する助成金(2014年度~2016年度の3か年)を基に実施した調査旅行からの報告である。

上記「基盤研究C」の採択表題に示す研究テーマの下、筆者のテーマは各国の養成校学生や子どもたちの教材の実像とそれらの生成・錬成・伝播の過程に焦点を当て、他国の幼稚園教育を導入するにあたってのそれぞれの国情の把握や導入関係者の姿勢・思想を解明・考察することとした。特に筆者がこれまで取り上げてきた保育教材としての折り紙研究、その一環としての折り紙のルーツ探索を今回の共同研究に位置付けて取り組むことにしたのである。

その1年目として、2014年8月にドイツのフレーベル博物館を中心とした調査(館長のロックシュタイン氏への聞き取り並びに館内資料の収集)を、メンバー4人に荏司泰弘氏²⁾を連携研究者として加えて5人で実施した。その結果を報告する。なお筆者は前稿³⁾において、ドイツのドレスデン地方に残されていた折り紙作品の調査報告を行った。今回の調査はその継続的研究としての意味も持つ。本稿は幼児教育関係者に大きな影響を与えた、“幼稚園の創始者であるドイツのフレーベル”の教材(恩物・手技)に占める折り紙の実像を明らかにすべく、資料が保存・管理・公開・研究・継承されているフレーベル博物館(FRIDRICH FRÖBEL MUSEUM)を対象としたものである。第1に旅程と調査旅行の概要を示し、第2に調査内容の報告を行う。結びに成果と今後の課題を記す。

1. 旅程と旅行概要

1日目（8月11日）

平成26年8月11日(月)大阪・関西国際空港発 10:05 フランクフルト空港着 14:50
飛行機を乗り継ぎ、ベルリン・テーグル空港着 17:55着 ベルリン市内に宿泊

2日目（8月12日）

ベルリン駅発 9:00 ドイツ鉄道にてイエナ経由でルドルシュタット着 13:00 タクシーにてバド・ブランケンブルクの宿泊先に着 14:00

フレーベル博物館館長ロックシュタイン（Margitta Rockstein）氏に挨拶並びに翌日以降の打ち合わせ。荘司氏の案内により周辺施設（フレーベル幼稚園・保育所、小学校、養護施設、フレーベル時代の園庭跡、遊具製作所、保育者養成所跡他）を辿り、説明を受ける。15:00～18:00

3日目（8月13日）

同行メンバーによる打ち合わせ 9:00～10:30

ロックシュタイン氏への聞き取り調査、場所は館長室（フレーベル博物館3階）。なお、通訳は荘司泰弘氏。事前に提出しておいた10の質問項目に対して順次回答していただく方法。11:00～15:00

*写真並びにビデオ撮影の許可を受ける（資料として収集）。

フレーベル幼稚園・保育所を訪問、園長先生より施設の内容・保育の特徴の説明を受ける。通訳は荘司泰弘氏（ドイツ語を日本語訳）と同園の若い先生（ドイツ語を英語訳）並びに甲斐仁子氏（英語を日本語訳）。その後園長先生より施設内を案内され見学する。15:15～17:30

4日目（8月14日）

フレーベル博物館館内見学並びに資料収集。10:00～12:00

ロックシュタイン氏より聞き取り調査、講義・演習。資料庫より貴重な資料を見せてくださる（折り紙関係資料他）。13:00～15:40

記録整理、ミーティング 16:00～18:00, 19:00～21:00

5日目（8月15日）

フレーベル博物館館内資料収集、ロックシュタイン氏へ挨拶 10:00～11:30 ホテルの送迎車にてザールフェルト駅着、ドイツ鉄道でドレスデンへ移動、ドレスデン泊

6日目（8月16日）

ドレスデンにおいて視察予定のフレーベルハウス、折り紙博物館の視察が出来ず、荘司泰弘氏への聞き取り調査、ミーティングに充当。終日ドレスデン泊

7日目（8月17日）

ドレスデン駅発フランクフルト駅までドイツ鉄道で移動（ほぼ1日）。車中にて同行メンバーによる記録確認・ミーティング。フランクフルト泊

8 日目（8 月 18 日）

フランクフルト空港発 13:20

9 日目（8 月 19 日）

大阪・関西国際空港着 7:10

2. 調査内容の報告

(1) 調査に際して

前稿において紹介したように、折り紙のルーツについては諸説あり、いまだ確定されていないのが現状である。その中では日本発祥説とヨーロッパ発祥説が有力と考えられている。前者のわが国の折り紙——儀式的なものでなく、いわゆる遊びの折り紙——の発祥を証する資料としては、大塚由良美氏、岡村昌夫氏他折り紙関係者が紹介しているように⁴⁾魯縞庵義道（著）『千羽鶴折形』（1797年）に図入りで示された“鶴”の繋ぎ方（2羽～99羽）の違いによる49種類の繋ぎ鶴の作品事例が一つの根拠とされる。

また後者のヨーロッパ発祥説の一つの根拠資料としては、筆者が検証した「作品の『馬と騎士』は、ドイツ人の画家であり教育者のアドルフ・ゼンフにより、1809年から1812年の間にドレスデンで発明されたものである。」⁵⁾があげられよう。年代的には日本の方が若干早いものの、同年代といえなくもない。しかしながら作品が“鶴”と“馬と騎士”というように題材も形も全く違うことから、それぞれ別個に発祥したように考えられる。

ところでドイツでは、幼稚園の創設者フレーベルが折り紙の発展者として位置付けられている。氏は折り紙を教材として採用し、自身の教育思想の具現化である恩物を応用した手技の一つに活用した。白い洋紙を正方形にカットし、折り方をパターン化して提示・普及させた。それまでに発祥していた幾つかの折り紙作品とは別に、全く新しい視点から取り組んだのである。例えば、筆者が2012年ドイツ・フランクフルトの書店において入手した「Das GroBe Fröbelbuch」⁶⁾には、

折り紙はヨーロッパでよく知られてはいたが、19世紀のはじめ Fridrihch Fröbel が幼稚園への導入を思いついたのを機に、はじめて栄えた。Fröbel は、子供たちの才能を伸長するためのひとつの表現方法として折り紙を選んだ。子供たちは多くの幾何学的な模型をつくりながら、精確さや均整に対する感性を身につけ、幾何学の基本構想を発見していった。

「美の形式」は非常に有名になった。単純な形から成る、様々な星や花のパターンである。子供たちは本のなかにあるひな型を集める。このパターン集は、Fröbel の活動の記念品として、今日でも高く評価されている（日本語訳/磯部亜依）。

と解説されている。取り分け筆者にとって衝撃だったのは、筆者をはじめ日本の子ども

もたちが“だまし舟”として遊んでいる折り紙作品が「Die Fröbelschiffe」(フレーベルの舟)として完成品と作り方が載っていたことであった。もっとも、この作品についてはフレーベルの創作であった⁷⁾と紹介されている資料はあった。他にもフレーベル資料の一つ「Das Falten」⁸⁾にはフレーベルの手技の具体例として折り紙の折り方が幾何学的デザインから具象的な作品まで図入りで紹介されているが、その中に“帆かけ舟”⁹⁾としていわゆる“だまし舟”が図示(図1)されている。フレーベルが手技一般の開発に着手したのが1830年代と考えれば、場合によってはそれ以前にあった上述の折り紙などを周知していたかもしれないと推測することもできよう。そうした疑問や問題意識を持ってフレーベル博物館での調査を実施した。今回の調査内容は膨大のため、本稿においては筆者のテーマ並びに周辺事項に絞って紹介する。なお、通訳は荘司泰弘氏による。

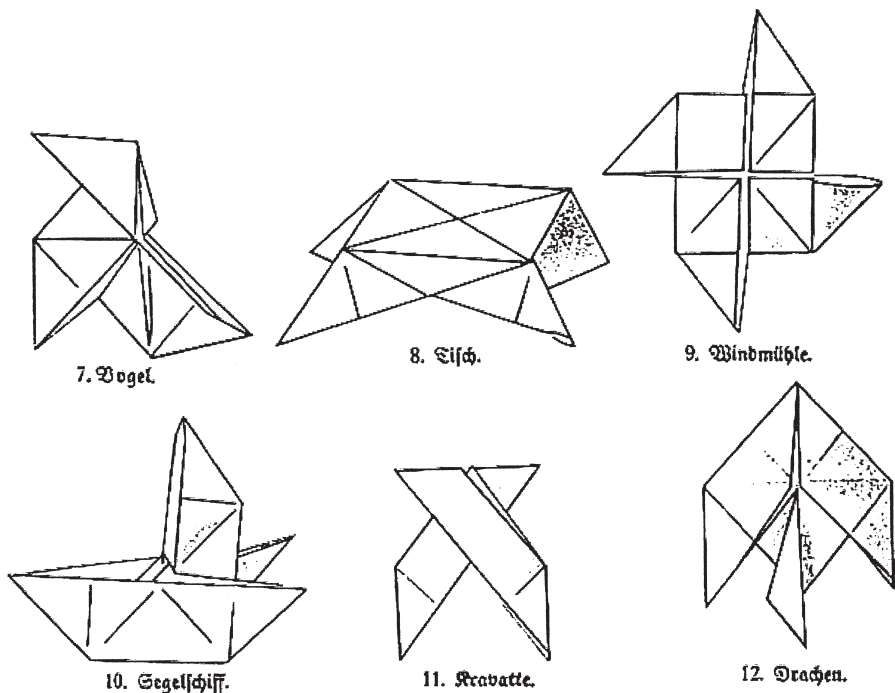


図1. フレーベルの折り型例中の“だまし舟”

(<http://www.fröbel.ne.jp/buch/242/24202.html> より引用 2014年6月9日閲覧)

(2) Kustodin Margitta Rockstein 氏からの聞き取り調査

1 日目の調査報告概要

日本におけるフレーベル幼稚園の紹介者としての松野クララ女史についての質問を通して、女史の旧姓であるクララ・ツイーダーマンの綴りが、明治期より流布されている Ziderman ではなく、Zitelman であることが確認された。

フレーベルの養成校の教育内容については、東ドイツの研究者であったエリカ・ホ

フマンの研究からフレーベルの最後の直弟子であるミナ・シエルフォンがワイマール養成校の学生として学んだ時の内容が明らかになった。養成校の学科目として設定された11科目は以下の通りである。

1. 教育原論, 2. 人間の歴史 (人類学), 3. 人智学, 4. ドイツ語 (国語・文法),
5. 自然, 6. ドイツの歴史, 7. 文学 (ゲーテ, シラー), 8. 歌 (母の歌と愛撫の歌, 日本のわらべうたのように会話のイントネーションに沿った歌), 9. 描画,
10. 遊びと作業 (手遊び・積木他) の理論と実践, 11. 子育ての仕方・支援法 (父母向き)

卒業資格については特に定められた基準や証書のようなものはなく、フレーベルは二つの要件——歌がどれだけうまいか、子どもをどれだけ好きか——を満たすことを何より重視していたという。

氏は具体的職名を、キンダーガートナー (男性保育士), キンダーガルトナー (女性保育士), またキンダーフレーガー (男性福祉士), キンダーフレーガリンネン (女性福祉士) と命名した。男女別に、また保育と福祉の職域別に呼称を分けている。わが国では専ら幼稚園の創設者として紹介されているフレーベルであるが、呼称の名付け方からみて、幼稚園教育に特化したものではなく、当初より広く保育・福祉領域も視野に含めていたことが分かる。

フレーベルの幼児教育の伝播について、組織・協会の盛衰並びにアメリカ・イタリア・日本への経路の説明を受けた。

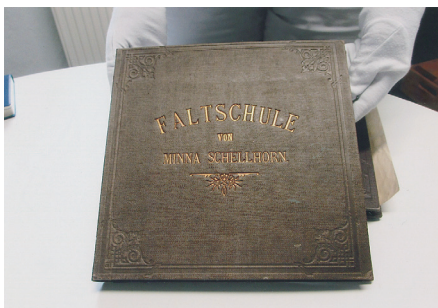


写真1



写真2

筆者が「フレーベルが折り紙の“だまし舟”を本当に創作もしくは作成したのか知りたい」と懇願したのに応えて、ロックシュタイン氏は生前 (亡くなる2年前) である1850年の「折る形」(FALTFORMEN) の見本帳・アルバム (Vogse) を公開して下さった (写真1, 写真2)。アルバムは3冊あり、カイルハウ、ブランケンブルグの養成校で学生たちに使用されていた実物である。そこには幾何学模様を折った平面の折り紙作品とともに、“屋根付き舟 (だまし舟)” が確かにあった。これはフレーベルの生前のものであるから、本人直伝である証となると説明された。筆者が日本の折り紙作品のように思っていた“だまし舟”はドイツのフレーベルに由来するもので

あった。フレーベルの手技の一つに位置付けられている“折り紙”に関してはフレーベルの死後1860年代にアウグスト・ケーラーが『幼稚園の折り紙』を、またその弟子であるマリー・ウンダシュンが『折り紙』を出版して継承していったという。

2日目の調査概要

ロックシュタイン館長から恩物の実技模範を見せていただいた。第1恩物、第3恩物、そして折り紙を取り上げてくださった。幾何学（図形）の世界を表現する一環として正方形の板（第7恩物である色板）を、そしてそうした恩物の応用である手技の材料として正方形の紙を用意したことがスタートであった。実技模範は折り紙を二つに折ることから始まる。長方形が二つになるケースと三角形が二つになる2ケースがある。さらに小さな正方形や三角形を均等に折ってゆく過程を通して複雑かつ美しい幾何学模様が次々とできていく。その数学的法則に則った折りの過程で、我々日本人が“だまし舟”“奴さん”“袴”と名付けて、あたかも日本に由来する具象作品と思いつ込んでいた形が折り出されたのである。



写真3



写真4

折り紙に興味を示す筆者に配慮して、館長はフレーベル自身の折った折り紙作品を詰めた紙製の箱を資料庫から持ち出して、白手袋をはめた手で丁寧に一つひとつ取り出して見せて下さり、撮影も許可して下さいました。紙製の箱の蓋にはペンで1個1個サインがされている。フレーベルの使用した白い折り紙用紙は酸性紙という痛みやすい素材であり、実際、生成り色に変色した紙にはしみが点々と浮き出していた。館長曰く、おそらくこれが最後の公開であろうとのことだった。(写真3、写真4)

(3) フレーベル博物館の展示資料調査

折り紙に関する展示資料（博物館4階に展示）が複製品ではあるが系統的に整理されて展示されていた。その中から今回の筆者の課題に沿う作品を掲載する。(写真5、写真6、写真7、写真8)

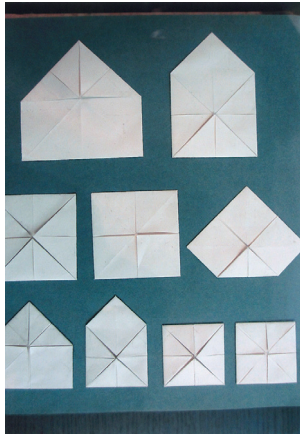


写真5

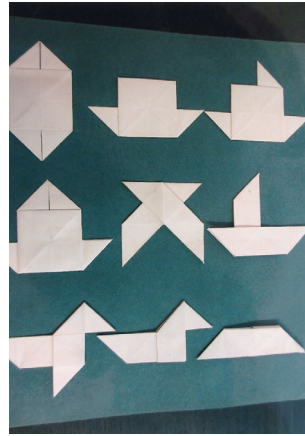


写真6

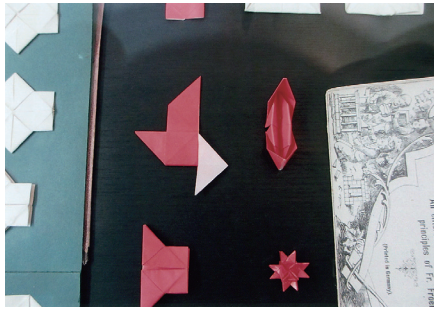


写真7

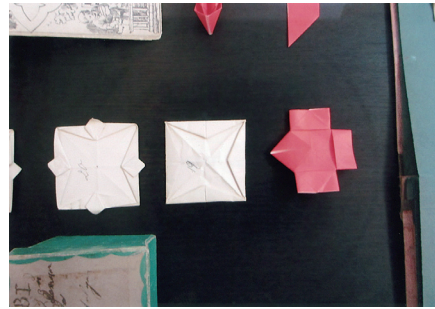


写真8

結 び

今回の調査を通して、わが国の折り紙作品に繋がるルーツの一端が明らかになった。我々が“だまし舟”として遊んでいた折り紙がフレーベルの創作によるものであったこと、のみならず、江戸時代の日本の風物である“奴さん”や“袴”もフレーベルの折り紙に始まっていた。一体どのような経緯で日本の折り紙に取って代わったのか興味はつきない。

今回フレーベル自身の折った白い酸性紙製の作品群を見る機会を得て、約170年に渡って後継者の手で大切に保存されてきたこと、またその作品の精緻さと清々しさに感動を覚えた。現在の折り紙の寸法は15センチ四方が一般的であるが、フレーベルの折り紙は10センチ四方である。大人の手でこの寸法の紙を細密に折れる折り手は極一部の手先の器用な人に限られる。まさにフレーベルはその一人であった。この生来の資質が氏の思想を具現した独創的折り紙を導いたことを実感・確認したことは何よりの収穫である。

フレーベルの養成校の学生たちはフレーベルの折り紙のパターンの習得と並行し

て、授業・保育の場では子どもたちが喜ぶ作品を自由に折ることが推奨されたともいわれる。ドイツ国内の様々な出身地、諸外国からの移民もしくは国外からの留学生など多様な文化的背景を持つ学生たちを通して作品が紹介・交流され、また子どもたちとの実践の中から多くの作品が新たに生まれたであろうと考える。そうした作品事例を探索し、フレーベル精神の理解とも絡めて引き続き折り紙研究を深めてゆきたい。

付 記

Frau Rockstein, der Leiterin von Friedrich-Fröbel-Museum, möchte ich hier für ihre Hilfe meinen herzlichsten Dank ausdrücken.

今回の調査に対し、多大なご協力を惜しみなくいただいたフレーベル博物館のロクシュタイン館長に心より感謝いたします。また、調査報告書作成にあたり、共同研究者並びに連携研究者の方々にご協力・ご支援をいただきました。資料整理に関し、本学教育学部渡邊康准教授並びに磯部亜依（南山大学外国語学部ドイツ学科4年生）さん、伊藤真緒（椋山女学園大学教育学部4年生）さんに助力をお願いしました。心よりお礼申し上げます。

■注

- 1) オムリ慶子（関西学院大学教育学部教授）、甲斐仁子（東洋英和女学院大学人間科学部保育子ども学科教授）、山田りよ子（藤女子大学人間生活学部保育学科准教授）。
- 2) 荘司泰弘（常磐会学園大学国際こども教育学部教授）。
- 3) 大森隆子「折り紙のルーツを訪ねるドイツの旅」、『椋山女学園大学教育学部紀要』, Vol. 7, pp. 287-294, 2014年。
- 4) 大塚由良美『桑名の千羽鶴 一枚の紙から数羽の鶴を折る「千羽鶴折形」より』, リバティ書房, 1987年。岡村昌夫「つなぎ折鶴の世界—連鶴の古典 秘伝千羽鶴折形—」, 本の泉社, 2006年。
- 5) 前掲「折り紙のルーツを訪ねるドイツの旅」, p. 291。
- 6) Armin Taubner「Das groBe Fröbelbuch」, Frechverlag, 2012年。
- 7) この件に関しては、和久洋三が『遊びの創造共育法 6 色面の遊びと造形』, 玉川大学出版部, 2006年。の中で、フレーベルの折り紙 エドワード・ヴィーベ「子どもの楽園」よりとして紹介している。
- 8) <http://www.froebel.ne.jp/buch/242/24201.html> (2014年6月9日閲覧)。
- 9) 同上, p. 4/14。